

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19401034

研究課題名（和文）古代エジプト新王国第 18 王朝時代後期の岩窟墓の調査研究

研究課題名（英文）The Study on the late 18th Dynasty Rock-cut Tombs in the New Kingdom, Egypt

研究代表者

近藤 二郎（KONDO JIRO）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：70186849

研究成果の概要（和文）：

本研究では、20 世紀初頭に簡単な調査が実施されているだけで正確なプランさえも判らなかつたテーベ西岸アル=コーカ地区に位置する岩窟墓第 47 号（ウセルハト墓）の発掘調査を 4 年間にわたり実施することにより、ウセルハト墓の再発見に成功し、同墓入口上部に施された非常に精緻なレリーフを発見することができた。この発見は、アメンヘテプ 3 世治世の岩窟墓研究にとって極めて重要なものであり、新たな編年案を提示するなどの成果があった。

研究成果の概要（英文）：

The project initiated clearance, conservation and documentation at the tomb of Userhat (TT 47), at al-Khokha area in 2007. Although the tomb of Userhat is one of the most important private tombs from the reign of Amenhotep III, the comprehensive scientific research has not yet been conducted after 1903 since its location had been missing. I uncovered the entrance of the tomb of Userhat, which has the lintel and doorjambs on both side. It is important for me to make a new chronological table of rock-cut tombs under the reign of Amenhotep III by the rediscovery of the tomb of Userhat.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2008 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2009 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2010 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
総計	12,000,000	3,600,000	15,600,000

研究分野：人文学B

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：エジプト、考古学、新王国、岩窟墓、ウセルハト、アメンヘテプ 3 世、

1. 研究開始当初の背景

本研究の申請者は、1976 年以来、今日まで約 35 年間にわたり、エジプト・アラブ共和国において、エジプト王朝時代の遺跡の発

掘調査に携わってきた。特にマルカタ南遺跡、マルカタ王宮址、王家の谷・西谷アメンヘテプ 3 世墓、テーベ西岸岩窟墓群、ダハシュール北遺跡など新王国第 18 王朝アメンヘテプ

3 世時代を中心とする時期の遺跡の研究を主として実施してきた。平成 6 (1994) 年には申請者は「テーベ私人墓第 47 号」(『エジプト学研究』第 2 号、pp.50-60)と題する論文を發表し、テーベ西岸岩窟墓第 47 号(ウセルハト墓)の重要性や調査研究するための問題点などをまとめ、論考發表後も現地踏査を含めて、この岩窟墓に関する資料収集に努めてきた。平成 15 (2003) ~16 (2004) 年度においては、科学研究費補助金(基盤研究(C))「古代エジプト新王国時代岩窟墓の編年学的研究(課題番号 15520483)」により、新王国時代のテーベ西岸に位置する岩窟墓の編年の再確立を実施し、第 18 王朝時代後期以降の岩窟墓の編年を再構築することにより、具体的な問題点を明らかに出来た。

2005 年以降、エジプト・アラブ共和国ルクソール市西岸のクルナ村地区で、岩窟墓周辺に居住する住民の大規模な移住計画が本格化し、アル=コーカ地区に位置するテーベ西岸岩窟墓第 47 号(ウセルハト墓)とその周辺の民家の撤去が行われた。そのため、20 世紀初頭の調査以来、アクセスすることが困難で、実状を把握することができなかつたウセルハト墓とその周辺の発掘調査が実施しやすい状況となり、その本格的な調査を計画することとなった。これまでの調査では、この岩窟墓の正確な方位やプランさえも明確ではなく、新王国第 18 王朝アメンヘテプ 3 世時代の岩窟墓を総合的に判断するために基礎的データを取得することが不可欠とされた。

2. 研究の目的

1902 年 12 月~1903 年 1 月にかけて実施されたウセルハト墓の発掘調査を検証し、その後、100 年間に 5m 以上におよぶ砂礫の厚い堆積があり、この砂礫層の除去によって、正確なプランを明らかにすることや、周辺の岩窟墓の造営プロセスを明らかにすることも重要な研究目的である。これらの一連の作業により、これまで不明であったウセルハト墓の造営年代やプラン、墓内装飾等を明らかにすることで、新王国第 18 王朝後期のアメンヘテプ 3 世時代の岩窟墓の推移を詳細に検討することが可能となり、次のアメンヘテプ 4 世時代への移行の問題、「アマルナ時代」の位置付けを実施することも目的とした。

3. 研究の方法

研究の方法としては、アル=コーカ地区においてテーベ岩窟墓第 47 号(ウセルハト墓)上部および、周辺部の堆積砂礫の除去作業を実施することで、ウセルハト墓がどのような規模とプランを持つものであるかを明らかにしていった。またウセルハト墓の周囲に位置するテーベ西岸岩窟墓第 174 号、-62-号、

第 264 号、-330-号のクリーニングと詳細なプランの作図を実施することで、ウセルハト墓の造営や、墓が位置するワーディ(潤谷)における岩窟墓の立地を考察することも行った。岩窟墓の編年を確立するために、墓内装飾の比較検討や出土遺物(土器、シャブティ像、葬送コーン、ビーズ類)の検討を実施している。

4. 研究成果

アル=コーカ地区のテーベ西岸岩窟墓第 47 号(ウセルハト墓)とその周辺の発掘調査を実施した。このウセルハト墓は、新王国第 18 王朝アメンヘテプ 3 世時代の高官の岩窟墓ではあるが、20 世紀の初頭に簡単な発掘作業とそれにとまなう簡単な報告があるだけであり、その後、岩窟墓は厚い堆積砂礫の下に完全に埋没し、ウセルハト墓(TT.47)の正確な位置も不明となり、墓に近づくことさえも不可能な状態にあった。

平成 20(2008)年 12 月~平成 21(2009)年 1 月に実施された発掘調査により、1903 年以降、その存在がほとんど不詳で、長い期間にわたり行方不明であったウセルハト墓(第 47 号墓)の入口上部を約 100 年ぶりに再発見することに成功したが、墓の上部を覆う砂礫層は当初、想像していたものより膨大で、6~7 m の厚さに及んでおり、また岩窟墓の岩盤の質も脆いために、発掘調査は困難を極めた。

最終年であった 2010 年 12 月から 2011 年 1 月にかけて実施された第 4 次調査によって、ウセルハト墓内部の様子を確認することができたが、前室天井部の大部分が崩落しており、全面発掘を完了するまでには至らなかった。今後は、岩窟墓の保存・修復作業を実施しながら岩窟墓内部の充填砂礫の除去を行っていく必要があり、全ての調査が終了するまでには、さらに数年から 10 年程度の歳月が必要であることが判明した。

しかしながら、ウセルハト墓の正確な位置と凡そのプランを確認することができた。また、これまで明らかになった碑文や出土品の解析によりいままで不明であったウセルハト墓の様相が明らかになり、僅かではあるが所謂「アマルナ時代」直前の様相を明らかにする手掛かりを得ることができた。特に、同墓の入口上部のリンテルに施された精緻なレリーフ装飾(図 1)は、題材やレリーフの様式などからアメンヘテプ 4 世(後のアクエンアテン王)時代初期のテーベ岩窟墓第 192 号(ケルエフ墓)の入口上部のレリーフ装飾(図 2)と酷似しており、岩窟墓の編年を構築する上で非常に重要な資料となっている。

ウセルハト墓で両脇に神々を礼拝する被葬者が描かれている同じ場所には、ケルエフ墓では、アメンヘテプ 4 世と彼の母ティイが描かれている。太陽の日の出の方向である東

面に面した墓の入口に、太陽神であるラー・ホルアクティ神とアトウム神の姿を描いていることは興味深い。

また、不思議なことにこのウセルハト墓の墓入口上部のレリーフ装飾は、1903年のハワード・カーター(Howard Carter)の報告にはなく、アメンヘテプ3世~同4世時代のテーベ西岸における岩窟墓の編年を考慮する上で極めて重要な発見となっている。



図1 再発見されたウセルハト墓入口上部の神々と被葬者の装飾(2009年1月撮影)



図2 ケルエフ墓(TT192)入口上部に描かれた神々とアメンヘテプ4世の装飾

さらにアル=コーカ地区のウセルハト墓の周辺に位置する岩窟墓のクリーニングと正確な墓のプランを得るために測量調査を実施し作図した。これまで、この地区の岩窟墓群の図面としては、ドイツのカンプ(Kammp)が1996年に発表したもの(図3)があるが、必ずしも正確なものではなく、今回のプロジェクトにおいて新たに測量作業を実施して、より正確で比較検討できる図面を作成した。それが図4である。図3と図4の平面図を比較すれば明らかなように、カンプの図は略測によって描かれたもので、この図面から岩窟墓の構造や比較などを実施することは困難なものであることが判るであろう。また図3では、ウセルハト墓(TT47)が南北に中心軸を

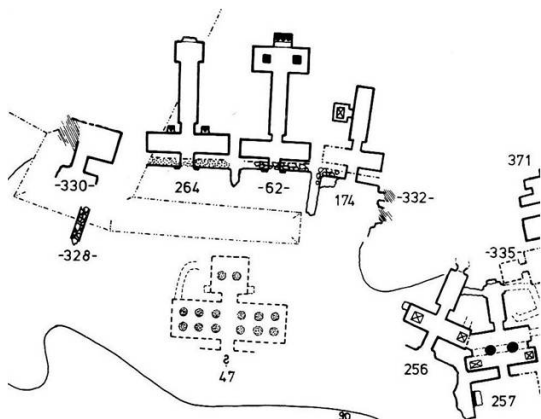


図3 従来の遺構平面図(Kammp, F. 1996)

もつものと推定されるが、実際には図4に見られるように中央の軸線は西北西に向いており、アル=クルンの頂に向いて配置されていることが判明している。

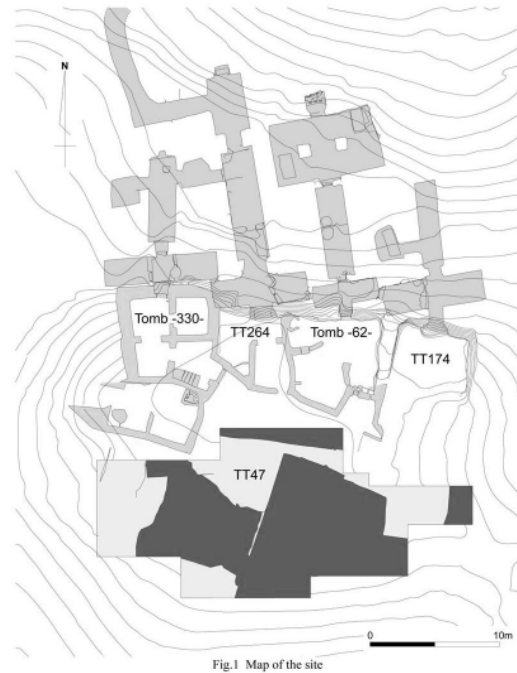


図4 第47号墓と周辺図(Kondo 他, 2010)

新王国第18王朝アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓で、内部に精緻なレリーフ装飾が施されたテーベ西岸に位置する第47号墓以外の5基の岩窟墓(第48号、第55号、第57号、第192号、第-28号)の比較研究を実施した。同じ関心を有するアメリカ、ロシア、オーストリア、スペイン、オーストラリア、イギリス、ドイツ等の研究者たちと意見の交換を活発に実施することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

(1) 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・西坂朗子・高橋寿光「第3次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第17号、2011年3月、45-63頁

(2) 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・西坂朗子・高橋寿光「第2次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第16号、2010年3月、47-77頁

(3) 近藤二郎「古代エジプトの祝祭都市テーベの景観と配置」『西アジア・エジプトにおける古代都市の成立と発展—都市景観の背

後にあるもの一』日本西アジア考古学会、2010年1月、39-44頁

(4) 近藤二郎「古代エジプトの靈魂観」『古代世界の靈魂観』、アジア遊学 128、勉誠出版、2009年12月、13-22頁

(5) 近藤二郎「新たな発見はエジプト学に何をもたらすのか」『エジプト発掘NHKスペシャル：解き明かされる4つの謎』日本放送協会出版、2009年9月、234-247頁

(6) 犬井正男・佐藤真知子・稲垣敏彦・菊地敬夫・吉村作治「アメンヘテプ3世王墓壁画のデジタル画像化」『日本写真学会誌』巻72別冊、2009年5月、11-12頁

(7) 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合望・西坂朗子・高橋寿光「第1次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第15号、2009年3月、39-70頁

(8) 高橋寿光・吉村作治・近藤二郎「2006年-2007年度アメンヘテプ3世王墓出土土器調査概略報告」『エジプト学研究』第15号、2009年3月、71-92頁

(9) 近藤二郎「考古学研究のあゆみ」『現代社会の考古学』（現代の考古学1）所収、朝倉書店、19-37頁、2007年9月

〔学会発表〕（計13件）

(1) 近藤二郎「エジプト新王国第18王朝アメンヘテプ3世時代の岩窟墓について」『第52回日本オリエント学会大会』国士舘大学世田谷キャンパス、2010年11月6日

(2) 近藤二郎「テーベ西岸岩窟墓調査2009-10」『エジプト・フォーラム 19』早稲田大学大隈記念講堂、2010年10月30日

(3) 近藤二郎「ルクソール西岸貴族墓調査」『エジプト・フォーラム 2009-1』早稲田大学エジプト学会、小野梓講堂、2009年11月16日

(4) 近藤二郎「早稲田大学エジプト学研究所の調査(III)ルクソール西岸岩窟墓調査」『日本オリエント学会第51回大会』同志社大学今出川キャンパス、2009年10月10-11日(ポスター)

(5) 柏木裕之「古代エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡から発見された新王国時代の高官墓について」『日本建築学会大会学術講演研究発表会』東北学院大学、2009年8月

(6) 西坂朗子・近藤二郎「世界遺産エジプト、テーベ・ネクロポリスにおける民家取り壊しと遺跡保存の現状」『文化財保存修復学会第31回大会』倉敷市芸文館、2009年6月13-14日(ポスター)

(7) 柏木裕之「古代エジプト、シャフト墓の掘削工程から探る標準化された墓の先行掘削について」『建築史学会2009年度大会研究発表会』名古屋工業大学、2009年4月

(8) 近藤二郎「早稲田大学によるエジプト調査—2008年度の成果—」『第16回西アジア発掘調査報告会』池袋サンシャインシティ文化会館7階会議室、2009年3月14日

(9) 近藤二郎「ルクソール西岸岩窟墓第47号墓の再調査」『日本オリエント学会第50回大会』筑波大学春日キャンパス、2008年11月2日

(10) 近藤二郎「ルクソール西岸岩窟墓47号(TT.47)の調査」『日本オリエント学会第50回大会』筑波大学春日キャンパス、2008年11月2-3日(ポスター)

(11) Takao KIKUCHI, "The Decoration Program in the Burial Chamber of the Royal Tomb of Amenophis III", Xth International Congress of Egyptologists, Rhodes, 22-29 May 2008.

(12) 近藤二郎「早稲田大学による2007年度のエジプト調査」『第15回西アジア発掘調査報告会』池袋サンシャインシティ文化会館7階会議室、2008年3月15日

(13) 近藤二郎「エジプト王朝時代の編年—新王国時代の編年—」『西アジア考古学の編年—日本の考古学調査団からのアプローチ』（西アジア考古学会10周年記念連続シンポジウム）、西アジア考古学会、池袋サンシャインシティ文化会館7階会議室、2007年6月

〔図書〕（計5件）

(1) 近藤二郎（監修）『ミイラの大研究』PHP研究所、2010年10月

(2) 近藤二郎『わかってきた星座神話の起源—エジプト・ナイルの星座』誠文堂新光社、2010年5月

(3) 近藤二郎（監修）『ビジュアル王家の谷のミイラ—古代エジプトの死後の世界』フランシス・ジャノ著。村田綾子訳、日経ナショナルジオグラフィック、2010年4月

(4)近藤二郎『エジプト考古学 (改訂版)』早稲田大学文学学術院、DNP アートコミュニケーションズ、2008年9月

(5)近藤二郎『最新エジプト学 甦る「王家の谷」』新日本出版社、2007年

〔その他〕

ホームページ等

http://www.littera.waseda.ac.jp/wever/egypt_j/goLogin.do

(ネクロポリスデータベース:近藤二郎編)

<http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/>
(早稲田大学エジプト学研究所)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤二郎 (KONDO JIRO)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号: 70186849

(3) 連携研究者

吉村作治 (Yoshimura, Sakuji)

早稲田大学・名誉教授

研究者番号: 80201052

菊地敬夫

サイバー大学・世界遺産学部・准教授

研究者番号: 10367112

柏木裕之 (Kashiwagi, Hiroyuki)

サイバー大学・世界遺産学部・准教授

研究者番号: 60277762